

# 薬草取

泉鏡花

青空文庫



日光掩蔽 にっこうおんべい 地 上 清 涼 ちじょうしやうりやう 鬢 鬣 垂 布 あいたいすいぶ 如 可 承 攬 によかしやうらん

其 雨 普 等 ごうぶとう 四 方 俱 下 しほうぐげ 流 樹 無 量 りゅうじゆむりやう 率 土 充 洽 そつどじゆうごう

山 川 險 谷 さんせんけんこく 幽 邃 所 生 ゆうすいしよじやう 卉 木 藥 艸 きぼくやくそう 大 小 諸 樹 だいしやうしよじゆ

「もし憚ながらお布施申しましょう。」

背後から呼ぶ優しい声に、医王山の半腹、樹木の鬱葱たる中を出でて、ふと夜の明けたように、空澄み、気清く、時しも夏の初を、秋見る昼の月の如く、前途遥なる高峰の上に日輪を仰いだ高坂は、愕然として振り返った。

人の声を聞き、姿を見ようとは、夢にも思わぬまで、遠く里を離れて、はや山深く入っていたのに、呼懸けたのは女であった。けれども、高坂は一見して、直に何ら害心のない者であることを認め得た。

女は片手拝みに、白い指尖を唇にあてて、俯向いて経を聞きつつ、布施をしようというのであるから、

「否、私は出家じゃありません。」

と事もなげに辞退しながら、立停つて、女のその雪のような耳許から、下膨れの頬に掛けて、柔に、濃い浅葱の紐を結んだのが、露の朝顔の色を宿して、加賀笠という、縁の深いので眉を隠した、背には花籠、脚に脚絆、身軽に扮装つたが、艶麗な姿を眺めた。

あなたは笠の下から見透すが如くにして、

「これは失礼なことを申しました。お姿は些ともそうらしくはございませんが、結構な御経をお読みなさいますから、私は、あの、御出家ではございませんでも、御修行者でいらつしやいましょうと存じまして。」

背広の服で、足拵えして、帽を真深に、風呂敷包を小さく西行背負というのにしてている。彼は名を光行とて、医科大学の学生である。

時に、妙法蓮華経薬草論品、第五偈の半を開いたのを左の掌に捧げていたが、右手に支いた力杖を小脇に搔上げ、

「そりやまあ、修行者は修行者だが、まだ全然素人で、どうして御布施を戴くようなものじゃない。」

読方だつて、何だ、大概、大学朱熹章句で行くんだから、尊い御経を勿体ないが、この山には葉の草が多いから、氣の所為か知らん。麓からこうやって一里ばかりも来たかと思うと、風も清々しい葉の香がして、何となく身に染むから、心願があつて近頃から読み覚えたのを、誦えながら歩行しているんだ。」

かく打明けるのが、この際自他のためと思つたから、高坂は親しく先ず語つて、さて、「姉さん、お前さんは麓の村にでも住んでいる人なんか。」

「はい、二俣村でございます。」

「あああの、越中の蛸波へ通う街道で、此処に来る道の岐れる、目まぐるしいほど馬の通る、彼処だね。」

「さようでございます。もう路が悪うございまして、車が通りませんものですから、炭でも薪でも、残らず馬に付けて出しますのでございます。」

それに丁どこの御山の石の門のようになつております、戸室口から石を切出しますのを、皆馬で運びますから、一人で五疋も曳きますのでございますよ。」

「それではその麓から来たんだね、唯一人。……」  
静に歩を移していた高坂は、更にまた女の顔を見た。

「はい、一人でございます、そしてこちらへ参りますまで、お姿を見ましたのは、貴方ばかりでございますよ。」

いかにもという面色して、

「私もやつぱり、そうさ、半里ばかりも後だった、途中で年寄った樵夫に逢つて、路を聞いた外にはお前さんきり。」

どうして往つて還るまで、人ツ子一人いようとは思わなかつた。」

この辺唯なだらかな蒼海原、沖へ出たような一面の草をしながら、

「や、ものを言つても一つ一つ罅に響くぞ、寂しい処へ、能くお前さん一人で来たね。」

女は乳の上へ右左、幅広く引掛けた桃色の紐に両手を挟んで、花籃を揺直し、

「貴方、その樵夫の衆にお尋ねなすつて可うございました。そんなに嶮しい坂ではござい

ませんが、些とも人が通いせんから、誠に知れにくいのでございます。」

「この奥の知れない山の中へ入るのに、目標があつた石ばかりじゃ分らんではないかね。」

それも、南北、何方か医王山道とでも繋りつけてあればまだしもだけけれど、唯河

原に転つてゐる、ごろた石の大きいような、その背後から草の下に細い道があるんだもの、

ちよいと間違えようものなら、半年経歴つても頂には行かれないと、樵夫も言つたんだが、

全体何だつて、そんなに秘かくして置く山だろう。全くあの石の裏ほかより外どこに、何処どこも路はないのだろうか。」

「ごさいませんとも、この路みちすじ筋すぢさえ御存いじで在あらつしやれば、世を離はなれました寂さびしさばかりで、獸けだものも可おそろしい恐おそのはおりませんが、一足でも間違まちがえて御覽ごらんなさいまし、何千丈じやうとも知れぬ谷で、行ゆきどま留どまりになりますやら、断崖きりぎしに突つきあたり当あたりますやら、流ながれに岩が飛びましたり、大木の倒れたので行く前まへが塞ふさがたり、その間には草樹くさきの多いほど、毒虫もむらむらして、どんなに難儀なんぎでございましょう。

旧もとへ帰かへるか、俱利伽羅峠くりからとうげへ出で抜ぬけますれば、無事むじに何方どちらか国へ帰かへられます。それでなくつて、無理に先へ参まゐりますと、終局しうまいには草くさ一ひとすじ条じょうも生なえまません焼山やけやまになつて、餓死うえじをするそうでございします。

本当に貴方あなたがおつしやいます通り、樵夫きさうりがお教え申まをしました石は、飛驒ひだまでも未すえ広ひろがりの、医王いおうの要かなめいし石いしと申まをしまして、一度踏外ふみはずしますと、それこそ路がばらばらになつてしまいますよ。」

名だたる北ほく国こく秘密ひみつの山、さもこそと思おもつたけれども、

「しかし一体、医王いおうというほど、此処ここで薬草やくそうが採とれるのに、何故なぜ世間よことは隔へだつて、行ゆきかよ

通がないのだろう。」

「それは、あの承りますと、昔から御領主の御禁山で、滅多に人をお入れなさらなかつた所為なんでございますつて。御領主ばかりでもござんせん。結構な御藥の採れます場所は、また御守護の神々 仏様も、出入をお止め遊ばすのでございましょうと存じます。」

譬えば 仙境に異霊あつて、恣に人の藥草を採る事を許さずというが如く聞えたので、これが少からず心に懸つた。

「それでは何か、私なんぞが入つて行つて、欲しい草を取つて帰つては悪いのか。」

と高坂はやや気色ぼんだが、悚然と肌寒くなつて、思わず口の裡で、

慧雲含潤

電光晃耀

雷声遠震

令衆悦予

日光掩蔽

地上清涼

靉靄垂布

如可承攬

二

「否、山さえお暴しなさいませねば、誰方がおいでなさいましても、大事なうそでござい



います。薬の草もあります上は、毒な草もないことはございませぬ。無暗な者が採りますと、どんな間違になろうも知れませぬから、昔から禁札が打つてあるのでございませぬよう。

貴方は、そうして御経をお読み遊ばすくらい、縦令お山で日が暮れても些ともお氣遣いな事はございませぬと存じます。「

言いかけてまた近き、

「あのさようなら、貴方はお薬になる草を採りにおいでなさるのでござんすかい。」

「少々無理な願ですがね、身内に病人があつて、とても医者のお薬では治らんじ極つたですから、この医王山でなくつて外にない、私が心当の薬草を採りに来たんだが、何姉さんは見懸けた処、花でも摘みに上るんですか。」

「御覧の通、花を売りますものでござんす。二日置き、三日置に参つて、お山の花を頂いては、里へ持つて出て商います、丁ど唯今が種々な花盛。

千蛇が池と申しまして、頂に海のような大な池がございませぬ。そしてこの山路は何処にも清水なぞ流れてはおりませぬ。その代暑い時、咽喉が渴きますと、蒼い小な花の咲きます、日蔭の草を取つて、葉の汁を噛みますと、それはもう、冷い水を一斗ばかりも飲

みましたように寒うなります。それがないと凌しのげませんほど、水の少とい処ところですから、菖蒲あやめ、  
 杜かきつばた若わ、河骨こうほねはござんせんが、躑躅つづしも山吹やまぶきも、あの、牡丹ぼたんも芍薬しやくやくも、菊の花も、  
 桔梗ききょうも、女郎花おみなえしでも、皆みんな一所いっしょに開ひらいていますよ、この六月から八月の末時すえ分ぶんまで。  
 その牡丹だの、芍薬だの、結構な花が取れますから、たんとお鳥ちやうもく目めが頂たかげます。まあ、  
 どんなに綺麗きれいでございましょう。

そして貴方あなた、お望のぞみの草くさをお採とり遊あそばすお心こころ 当あたりはどの辺へだでござんすえ。」  
 と笠かさながら差さ覗のぞくようにして親おやしく聞きく、時ときに清すずい目めがちらりと見みえた。

高坂たかさかは何なにとなく、物語ものがたりの中なかなる人ひとを、幽境ゆうきょうの仙家せんかに導まりく牧童ぼくどうなどに逢あう思おもいがし  
 たので、言ことも自おのから慰いん懃ぎんに、

「私も其処そこへ行ゆくつもりです。四季しきの花はなの一時いっときに咲さく、何なにという処ところでしょうな。」

「はい、美女びじよヶ原はらと申まします。」

「びじよがはら？」

「あの、美しい女おんなと書かきますつて。」

女おんなは俯うつむ向むいて羞はじたる色いろあり、物ものの淑つつましげに微笑ほほえむ様子ようす。

可なつかし懐なつかさに振ふり返かえると、

「あれ。」と袖を斜に、袂を取つて打傾き、

「あれ、まあ、御覧なさいまし。」

その草染の左の袖に、はらはらと五片三片紅を点じたのは、山鳥の抜羽か、非ず、蝶か、非ず、蜘蛛か、非ず、桜の花の零れたのである。

「どうぞございましょう、この二、三ヶ月の間は、何処からともなく、こうして、ちらちらちらちら絶えず散つて参ります。それでも何処に桜があるか分りません。美女ヶ原へ行きますと、十里南の能登の岬、七里北に越中立山、背後に加賀が見晴せまして、もうこの節は、霞も霧もかかりませんのに、見紛うようなそれらしい花の梢もござんせぬが、大方この花片は、煩い町方から逃げて来て、遊んでいるのでございましょう。それともあつちこつち山の中を何かの御使に歩いてゐるのかも知れません。」

と女が高く仰ぐに連れ、高坂も葎の中に伸上つた。草の緑が深くなつて、倒に雲に映るか、水底のような天の色、神霊秘密の氣を籠めて、薄紫と見るばかり。

「その美女ヶ原までどのくらいあるね、日の暮れない中行かれるでしょうか。」

「否、こう桜が散つて参りますから、直でございます。私も其処まで、お供いたしますが、今日こそ貴方のようなお連がございますけれど、平時は一人で参りますから、日一杯に

里まで帰るのでございます。」

「日一杯？」と思ひも寄らぬ状。

「どんなにまた遠い処のように、樵夫がお教え申したのでござんすえ。」

「何、樵夫に聞くまでもないです。私に心覚が丁とある。先ず凡そ山の中を二日も三

日も歩行かなければならないですな。

尤も上りは大抵どのくらいと、そりや予て聞いてはいるんですが、日一杯だのもう直

だの、そんなに輻く行かれる処とは思わない。

御覧なさい、こうやって、五体の満足なはいうまでもない、谷へも落ちなけりや、巖に

も躓かず、衣物に綻が切れようじやなし、生爪一つ剥しやしな。

支度はして来たつても餒い思ひもせず、その蒼い花の咲く草を捜さなけりやならんほど

渴く思ひをするでもなし、勿論この先どんな難儀に逢おうも知れんが、それだつて、花

を取りに里から日帰をするという、姉さんと一所に行くんだ、急に日が暮れて闇にな

ろうとも思われないが、全くこれぎり、一足ずつ出さえすりや、美女ヶ原になります

か。」

「ええ、訳はございません、貴方、そんなに可恐処と御存じで、その上、お薬を採り

に入らしたのでございますか。」

言下に、

「實際命懸で来しました。」と思ひ入つて答えると、女はしめやかに、

「それでは、よくよくの事でおあんなさいませようねえ。

でも何もそんな難しい御山ではありません。但此処は靈山とか申す事、酒を覆したり、竹の皮を打棄つたりする処ではないのでございます。まあ、難有いお寺の庭、お宮の境内、上つ方の御門の内のような、歩けば石一つありませんでも、何となく謹みませんとなりませんばかりなのでございます。そして貴方は、美女ヶ原にお心覚えの草があつて、其処までお越し遊ばすに、二日も三日もお懸りなさらねばなりませんような気がすると仰有いますが、何時か一度お上り遊ばした事がございますか。」

「一度あるです。」

「まあ。」

「確に美女ヶ原というそれでしょうな、何でも躑躅や椿、菊も藤も、原一面に咲いていたと覚えています。けれども土地の名どころじゃない、方角さえ、何処が何だか全然夢中。今だつてやつぱり、私は同一この国の者なんです、その時は何為か家を出て一月余、

山へ入つて、かれこれ、何でも生れてから死ぬまでの半分は徜徉さまよつて、漸々ようよう其処そこを見たように思うですが。」

高坂は語りつつも、長途ちやうとに苦み、雨露あめつゆに曝さらされた當時を思い起すに付け、今も、氣弱しんり、神疲しんれて、ここに深山みやまに塵ちり一つ、心に懸からぬ折ながら、なおかつ垂々たらたらと背そびらに汗。糸いとのような一条路ひとすじみち、背後うしろへ声を運ぶのに、力を要した所せ為いもあり、藥王品やくおうほんを胸むねに抱いだき、杖つゑを持った手に帽ぼうを脱はぐと、清ひたき額たいぬぐを拭ぬぐうのであつた。

それと見る目も敏さとしく、

「もし、御案内ご案内がてら、あの、私わたしがお前まへへ参まゐりましょう。どうぞ、その方がお話う話わも承うりようございますから。」

一議いちぎに及およばず、草鞋わらじを上げて、道みちを左ひだりへ片避かたよけた、足の底そこへ、草くさの根ねが柔やわらか、葉末はづえは脛はざを隠かくしたが、裾すそを引ひく荊いばらもなく、天地てんち閑かんに、虫むしの羽音はおとも聞きえぬ。

## 三

「御免ごめんなさいまし。」

と花売は、袂に留めた花片を惜やはらはら、袖を胸に引合せ、身を細くして、高坂の体を横に擦抜けたその片足も葎の中、路はさばかり狭いのである。

五尺ばかり前にすらりと、立直る後姿、裳を籠めた草の茂り、近く緑に、遠く浅葱に、日の色を隈取る他に、一木のありて長く影を倒すにあらず。

背後から声を掛け、

「大分草深くなりますな。」

「段々頂が近いんですよ。やがてこの生が人丈になって、私の姿が見えませんが、ようになります。」

と撫肩の優しい上へ、笠の紐弛く、紅のような唇をつけて、横顔で振向いたが、清しい目許に笑を浮べて、

「どうして貴方はそんなにまあ唐天竺とやらへでもお出で遊ばすように遠い処とお思いなさるのでございましょう。」

高坂は手なる杖を荒く支いて、土を騒がす事さえせず、慎んで後に続き、

「久しい以前です。一体誰でも昔の事は、遠く隔つたように思うのですから、事柄と一所に路までも遙に考えるのかも知れません。そうして先ず皆夢ですよ。」

けれども不<sup>のこらず</sup>残<sup>ざん</sup>事實<sup>じじつ</sup>で。

私が以前美女ヶ原で、藥草を採つたのは、もう二十年、十年が一<sup>ひとむかし</sup>昔<sup>むかし</sup>、ざつと二<sup>ふたむか</sup>昔<sup>むかし</sup>も前になるです、九<sup>このつ</sup>歳の年の夏。」

「まあ、そんなにお稚<sup>ちいさ</sup>い時。」

「尤<sup>もつと</sup>も一人じゃなかつたです。さる人に連れられて来たですが、始め家を迷つて出た時は、東西<sup>わきま</sup>も弁<sup>わ</sup>えぬ、取つて九<sup>このつ</sup>歳の小<sup>こ</sup>児<sup>ども</sup>ばかり。

人は高坂の光<sup>みい</sup>、私の名ですね、光坊<sup>みいぼう</sup>が魔<sup>ま</sup>に捕<sup>と</sup>られたのだと言いました。よくこの地で言う、あの、天狗<sup>てんぐ</sup>に攫<sup>さら</sup>われたそれです。また實際<sup>じつじ</sup>そうかも知れんが、幼<sup>おさな</sup>心<sup>こころ</sup>で、自分<sup>おのれ</sup>じや一端<sup>いっぽ</sup>親<sup>おや</sup>を思つたつもりで。

まだ兩<sup>ふた</sup>親<sup>おや</sup>ともあつたんです。母親<sup>おとつぎ</sup>が大病<sup>だいびょう</sup>で、暑<sup>あつ</sup>さの取<sup>と</sup>附<sup>つき</sup>にはもう医者<sup>いしや</sup>が見放<sup>みはな</sup>したので、どうかしてそれを復<sup>な</sup>したい一心<sup>いっしん</sup>で、藥<sup>くすり</sup>を探<sup>たづ</sup>ねに來<sup>き</sup>たんですな。」

高坂<sup>たかさか</sup>は少<sup>しばら</sup>時<sup>じ</sup>黙<sup>もく</sup>つた。

「こう言うと、何か、さも孝行<sup>こうぎょう</sup>の吹<sup>ふ</sup>聴<sup>ちやう</sup>をするよう<sup>よう</sup>で人<sup>ひと</sup>聞<sup>き</sup>が悪い<sup>わるい</sup>ですが、姉<sup>あね</sup>さん、貴<sup>あなた</sup>女<sup>な</sup>ばかりだから話<sup>わ</sup>をする。」

今<sup>いま</sup>でこそ、立派<sup>りつぱ</sup>な医者<sup>いしや</sup>もあり、病院<sup>びやういん</sup>も出來<sup>き</sup>たけれど、どうして城下<sup>じやうげ</sup>が二里<sup>にり</sup>四方<sup>しやうほう</sup>に開<sup>ひら</sup>けて



いたつて、北国の山の中、医者らしい医者もない。まあまあその頃、土地第一という先生まで匙を投げてしまいました。打明けて、父が私たちに聞かせるわけのものじゃない。母様は病気が悪いから、大人しくしろよ、くらいにしてあつたんですが、何となく人の出入、家の者の起居挙動、大病というのは知れる。

それにその名医というのが、五十恰好で、天窓の元げたくせに髪は黒い、色の白い、ぞろりとした優形な親仁で、脈を取るにも、蛇の目の傘を差すにも、小指を反して、三本の指で、横笛を吹くか、女郎が煙管を持つような手付をする、好かない奴。

私がちよこちよこ近処だから駈出しては、薬取に行くのでしたが、また薬局というのが、その先生の甥とかいう、ペロりと長い顔の、額から紅が流れたかと思う鼻の尖の赤い男、薬箆筒の小抽斗を抜いては、机の上に紙を並べて、調査をするですが、先ずその匙加減が如何にも怪しい。

相応に流行つて、薬取も多いから、手間取るのが焦つたさに、始終行くので見覚え、私がその抽斗を抜いて五つも六つも薬局の机に並べて遣る、終には、先方の手を待たないで、自分で調査をして持つて帰りました。私のする方が、かえつて目方が揃うくらい、大病だつて何だつて、そんな覚束ない薬で快くなるうとは思えんじやありません

か。

その頃父は小立野と言う処の、験のある薬師を信心で、毎日参詣するので、私もちよいちよい連れられて行つたです。

後は自分ばかり、乳母に手を曳かれてお詣をしましたッけ。別に拝みようも知らないの  
で、唯、母親の病氣の快くなるようと、手を合せる、それも遊び半分。

六月の十五日は、私の誕生日で、その日、月代を刺つて、湯に入つてから、紋着の袖の長いのを被せてもらいました。

私と言つては可笑いでしよう。裾模様すそもようの五ツ紋いつもん、熨斗目の派手な、この頃聞きや加賀染がぞめとかいう、菊だの、萩だの、桜だの、花束が紋もんになつてゐる、時節に構わず、種々いろいろの花を染交そめませてあります。尤も今時もつといまじきそんな紋着もんぎを着る者はない、他国たこくには勿論もちろんないです  
ね。

一体この医王山に、四季の花が一時いちじに開く、その景勝を誇るために、加賀かがばかりで染めるのだそうですね。

まあ、その紋着を着たんですね、博多はかたに緋ひの一本独鈷いっぽんどっこの小児帯こどもおびなぞで。

坊きらいやは綺麗きれいになりました。母も後毛おくれげを搔かきあ上げて、そして手水ちようずを使って、乳母うばが背後うしろ

から羽織はおらせた紋着に手を通して、胸へ水色の下じめを巻いたんだが、自分で、帯を取つて《しめ》ようとすると、それなり力が抜けて、膝を支いたので、乳母が慌あわてて確しつかり乎抱だくと、直すぐに天鵝絨びろうどの括くくりまくら枕まくらもとに鳩尾みぞおちを圧おさえて、その上へ胸を伏せたですよ。

産うんで下すつた礼を言うのに、唯御機嫌ただ好ようときえ言えば可いいと、父から言いつかつて、枕まくらもと頭に手を支ついて、其処そこへ。顔を上げた私と、枕に凭もたれながら、熟じつと眺めた母と、顔が合うと、坊や、もう復なほるよと言つて、涙をはらはら、差俯さしうつむ向いて弱よわ々よわとなつたでしよう。

父が肩を抱いて、徐そつと横に寝かした。乳母が、搔かきまきき巻まききを被きせ懸かけると、襟えりに手をかけて、向うを向いてしまいました。

台所から、中の室まから、玄関あたりは、ばたばた人の行交ゆきかう音おと。尤も帯もつとをしめようとして、濃ないお納戸なんどの紋着なりに下じめの装なりで倒れた時、乳母が大声で人を呼よんだです。

やがて医せん者せいが袴はかまの裾すそを、ずるずるとやつて駈かけ込こんだ。私には戸外おもてへ出て遊あそんで来こいと、乳母が言つたもんだから、庭から出たです。今も忘れない。何とも言いようのない、悲しい心細い思いがしましたな。」

花はな売うりは声細く、

「御道理でございますねえ。そして母様はその後快くおなりなさいましたの。」

「お聞きなさい、それからです。  
小児は切て仏の袖に縫ろうと思つたでしょう。小立野と言うは場末です。先ず小さな山くらいはある高台、草の茂つた空地沢山な、人通りのない処を、その薬師堂へ参つたです。」

朝の内に月代、沐浴なんかして、家を出たのは正午過だつたけれども、何時頃薬師堂へ参詣して、何処を歩いたのか、どうして寝たのか。

翌朝はその小立野から、八坂と言います、八段に黒い滝の落ちるような、真暗な坂を降りて、川端へ出ていた。川は、鈴見という村の入口で、流も急だし、瀬の色も凄いです。

橋は、雨や雪に白つちやけて、長いのが処々、鱗の落ちた形に中弛みがして、のらのらと架つているその橋の上に茫然と。

後に考えてこそ、翌朝なんです、その節は、夜を何処で明かしたか分らないほどですから、小児は晩方だと思ひました。この医王山の頂に、真白な月が出ていたから。しかし残月であつたんです。何為かというにその日の正午頃、ずっと上流の怪しげな

渡を、綱に掴まって、宙へ釣されるようにして渡った時は、顔が赫とする晃々と烈い日  
 当。  
 こういうと、何だか明方だか晩方だか、まるで夢のように聞えるけれども、渡を渡  
 つたには全く渡つたですよ。

山路は一日がかりと覚悟をして、今度来るには麓で一泊したですが、昨日丁度前の時  
 と同一時刻、正午頃です。岩も水も真白な日当の中を、あの渡を渡つて見ると、二十年  
 の昔に変わらず、船着の岩も、船出の松も、確に覚えがありました。

しかし九歳で越した折は、爺さんの船頭がいて船を扱いましたつけ。

昨日は唯綱を手繰つて、一人で越したです。乗合も何も無い。

御存じの烈しい流で、棹の立つ瀬はないですから、綱は二三条、染物をしんし張にし  
 たように隙間なく手懸が出来ている。船は小さし、胴の間へ突立つて、釣下つて、互  
 違に手を掛けて、川幅三十間ばかりを小半時、幾度もはつと思つちや、危さに自  
 然に目を塞ぐ。その目を開ける時、もし、あの丈の伸びた菜種の花が断崖の巖越に、  
 ばらばら見えんでは、到底この世の事とは思われなかつたらうと考えます。

十里四方には人らしい者もないように、船を纏つた大木の松の幹に立札して、渡船

錢三文とある。

話は前後になりました。

そこで小児は、鈴見の橋に亘んで、前方を見ると、正面の中空へ、私の掌を開いたように、五本の指の並んだ形、轟々立ったのが戸室の石山。靄か、霧か、後を包んで、年に二、三度好く晴れた時でないかと、蒼く踴れて見えないのが、即ちこの医王山です。

其処にこの山があるくらいは、予て聞いて、小児心にも方角を知っていた。そして迷子になったか、魔に捉られたか、知れもしないのに、稚な者は、暢気じゃありませんか。

それが既に気が変になつていたからであろうも知れんが、お腹が空かぬだけに一向苦にならず。壊れた竹の欄干に搦つて、月の懸つた雲の中の、あれが医王山と見ている内に、橋板をことごと踏んで、

向の山に、猿が三疋住みやる。中の小猿が、能う物饒舌る。何と小児ども花折りに行くまいか。今日の寒いに何の花折りに。牡丹、芍薬、菊の花折りに。一本折つては笠に挿し、二本折つては、蓑に挿し、三枝四枝に日が暮れて……とふと唄いながら……

何となく心に浮んだは、ああ、向うの山から、月影に見ても色の紅な花を採つて来て、それを母親の髪に挿したら、きつと病気が復るに違いないと言う事です。また母は、その

花を簪かんざしにしても似合うくらい若かったですな。」

高坂もとは旧来かたた方を顧かえりみたが、草ほかの外には何も無い、一歩前ひとあしききへ花売はなうりの女、如何いかにも身みに染しみて聞くように、俯向うつむいて行くのであった。

「そして確たしかに、それが薬師やくしのお告つげであると信じたですね。

さあ思い立あつては矢も楯たても堪たまらない、渡り懸けた橋を取とつて返して、堤防どて伝いに川上へ。後あとでまた渡わたしを越えなければならぬ路みちですがね、橋から見ると山の位置ありかは月の入る方いへ傾かたいて、かえつて此処ここから言うと、対岸むこうぎしの行留ゆきどまりの雲の上らしく見えまますから、小児心どもごころに取とつて返したのが丁ど幸ちよささいわいと、橋から渡場わたしばまで行く間まの、あの、岩淵いわぶちの岩は、人を隔へてる医王山いちおうざんの一の砦いちとりでと言いつても可よい。戸室とむろの石山いしやまの麓すくが直なに流ながれに迫せまる処ところで、累かさなり合あつた岩石いしだから、路みちは其処そこで切れるですものね。

岩淵いわぶちをこちらに見て、大方おおかた跣足はだしでいたでしょう、すたすた五里も十里も辿たどつた意つもりで、正午頃ひるに着いたのが、鳴子なるこの渡わたし。」

#### 四

「馬士にも、荷担夫にも、畑打つ人にも、三人二人ぐらいずつ、村一つ越しては川沿の堤防へ出るごとに逢つたですが、皆唯立停つて、じろじろ見送つたばかり、言葉を懸ける者はなかつたです。これは熨斗目の紋着振袖という、田舎に珍しい異形な扮装だつたから、不思議な若殿、迂濶に物も言えないと考えたか、真昼間、狐が化けた？ とも思つたでしょう。それとも本人逆上返つて、何を言われても耳に入らなかつたのかも解らんですよ。

ふとその渡場の手前で、背後から始めて呼び留めた親仁があります。兄や、兄やと太い調子。

私は仰向いて見ました。

ずんぐり脊の高い、銅色の巖乗造な、年配四十五、六、古い単衣の裾をぐいと端折つて、赤脛に脚絆、素足に草鞋、かつと眩いほど日が照るのに、笠は被らず、その菅笠の紐に、桐油合羽を畳んで、小さく縦に長く折つたのを結えて、振分けにして肩に投げて、両提の煙草入、大きいのをぶら提げて、どういう気か、渋団扇で、はたはたと胸毛を煽ぎながら、てくりてくり寄つて来て、何処へ行くだ。

御山へ花を取りに、と返事すると、ふんそれならば可し、小父が同士に行つて遣るべい。



但ただし、この前の渡を一つ越さねばならぬで、渡守わたしもりが咎立とがめだてをすると面倒じや、さあ、負おぶされ、と言うて背中を向けたから、合羽かっぱを跨またぐ、足を向うへ取とつて、猿さるの児背負こおんぶ、高く肩車かみぐるまに乗のせたですな。

その中うちも心の急せく、山はと見ると、戸室とむろが低ひくなって、この医王山いおうざんが鮮明あざやかな深翠ふかみどり、肩の上から下に瞰みおろ下くだされるような気がしました。位置は變かわつて、川の反対むこうの方に見えて来た、なるほど渡わたを渡わたらねばなりません。

足を压おさえた片手を後うしろへ、腰こしの両ふたつさげ提ての中をちやらちやらさせて、爺様じさま頼たのみます、鎮ちんじ守ゆの祭礼まつりを見に、頼たのまれた和郎わろじゃ、と言うと、船を寄よせた老人としよりの腰は、親仁おやしの両ふたつさ提げよりもふらふらして干柿ほしがきのように干ひからびた小さな爺じじい。

やがて綱つなに掴つかまつて、絶すると疾はやい事こと！

雀すずめが鳴なる子を渡わたるよう、猿さるが梢こすえを伝つうよう、さらさら、さつと。「

高坂たかさかは思おもわず足踏あしづみをした、草くさの茂しげりがむらむらと揺ゆいで、花片はなびらがまたもや散ちり来きる——  
二片ふたひら三片さんひら、虚空おぼぞらから。——

「左右ふなばたへ傾なぐ舷なへ、流ながれが蒼あざく擱からみ着きいて、真白ましろに颯さつと翻ひるると、乗のつた親仁おやしも馴なれたもので、小兒こどもを担かついだまま仁王立におうだち。

真蒼まつさおな水底みなそこへ、黒く透すいて、底は知れず、目前めさきへ押被おつかぶさつた大巖おおいわの肚はらへ、ぴたりと船いわかどが吸寄すいよせられた。岸は可恐おそろしく水は深い。

巖角いわかどに刻きざを入れて、これを足懸あしがかりにして、こちらの堤防どてへ上あがるんですな。昨日きのう私が越した時は、先ず第一番の危難に逢うかと、膏汗あぶらあせを流して漸々ようよう縋すがり着あがいて上つたですが、何、その時の親仁は……平気なものです。「

高坂たかさきは莞爾にっこりして、  
「爪尖つまさきを懸けると更に苦くなく、負おぶさつた私の方がかえつて目を塞ふさいだばかりでした。

さて、些ちつと歩行あるかっせえと、岸で下してくれました。それから少しずつ次第ながれに遠ざかつて、田の畦あぜ三つばかり横に切れると、今度は赤土あかつちの一本道、両側にちらほら松の植わっている処ところへ出ました。

六月の中ばとはいっても、この辺には珍めずらしい酷ひどく暑い日だと思いましたが、川を渡り切つた時分から、戸室山とむろやまが雲を吐いて、処々ところどころ田の水へ、真黒な雲が往いつたり、来たり。並木なみきの松と松との間が、どんよりして、梢こすえが鳴る、と思うとはや大粒な雨がばらばら、立樹たちきを五本と越えない中に、車軸うちを流す烈しい驟雨ゆうだち。ちよッ待て待て、と独言ひとりごとして、親仁おやしが私の手を取つて、そら、台なしになるから脱げと言うままにすると、帯を解いて、

もんつき  
紋着を剥いで、浅葱の襟の細く掛った襦袢も残らず。

こども  
小児は糸も懸けぬ全裸体。

雨は浴るようだし、恐さは恐し、ぶるぶる顫えると、親仁が、強いぞ強いぞ、と言つて、私の衣類を一丸げにして、懷中を膨らますと、紐を解いて、笠を一字に冠つたです。

それから幹に立たせて置いて、やがて例の桐油合羽を開いて、私の天窓からすつぽりと目ばかり出るほど、まるで洗紙の小児の小包。

いや！ 出来た、これなら海を潜つても濡れることではない、さあ、真直に前途へ駈け出せ、曳、と言つて、板で打たれたと思つた、私の臀をびたりと一つ。

濡れた団扇は骨ばかりに裂けました。

怪飛んだようになって、蹠踏けて土砂降の中を飛出すと、くるりと合羽に包まれて、見えるは脚ばかりじゃありませんか。

あかがえる  
赤蛙が化けたわ、化けたわと、親仁が呵々と笑つたですが、もう耳も聞えず真

暗三寶。何か黒山のような物に打付かつて、斛斗を打つて仰様に転ぶと、滝の  
ような雨の中に、ひひんと馬の嘶く声。

漸々人の手に扶け起されると、合羽を解いてくれたのは、五十ばかりの肥つた婆さん。

馬士まごが一人腕組うでぐみをして突立つったっていた。門かどの柳みどりの翠からから、黒駒くろこまの背しづくへ雲しづくが流れて、はや雲切くもぎれがして、その柳こすえの梢すえなどは薄雲うすぐみの底そこに蒼空あおぞらが動うごいています。

妙なものが降り込んだ。これが豆腐とうふなら資本もとでい入いらずじや、それともこのまま熨斗のしを付けて、鎮守ちんじゆさま様おさまへ納めさつしやるかと、馬士まごは掌てのひらで吸殻すいからをころころ遣やる。

主ぬしさ、どうした、と婆おばさんが聞きくんですが、四辺あたりをきよときよとすばかり。

何処どこから出た乞食こじきだよ、とまた酷ひどいことを言いいます。尤もつとも裸はだか体が渋紙しぶかみに包かまれていたんじや、氏素性うじすじようあろうとは思おもわぬはず。

衣物きものを脱ぬがせた親仁おやしはと、唯悔ただやしく、来きた方かたを眺ながめると、脊せが小さいから馬うまの腹はらを透すかして雨上りあめあがりの松並木まつなみぎ、青田あおだの縁へりの用水みづに、白鷺しらさぎの遠とほく飛とぶまで、睨なわてがずつと見渡みわたされて、西日あまがほんのり紅あかいのに、急いそな大雨あめで往來ゆききもぼつたり、その親仁おやしらしい姿すがたも見えぬ。

余あまの事ことにしくしく泣なき出すと、こりや餒ひもじうて口くちも利きけぬな、商売あきな品もので銭ぜにを嚙かませるよ  
うじやけれど、一つ振舞ふるもうて遣やろかいと、汚きたい土間どまに縁えん台だいを並ならべた、狭せまくなるしい暗くらい隅すみの、苔こけの生なえた桶おけの中なかから、豆腐とうふを半はん挺ちよう、皺手しわでに白しろく積たんで、そりやそりやと、頬ほ辺への処ところへ突出つきだしてくれたですが、どうしてこれが食くべられますか。

そのくせ腹はらは干ほされたように空くいていました、胸むね一杯いっぱいになつて、頭かぶりを掉ふると、はて食し

よくこのみ  
好よをする犬の、と呟つぶやいて、ぶくりとまた水へ落して、これや、慈悲じを享うけぬ餓鬼がきめ、  
出て失うせと、私の胸むねへ突つ懸かけた皺しわだらけの手の黒くろさ、顔うらも漆うるしで固かめたよう。

黒婆くろばばどの、情なさけない事ことせまいと、名なもなるほど黒婆くろばばといふのか、馬士まごが中なへ割わつて入いると、貸かしを返かせ、この人ひと足あめと怒ど鳴なつたです。するとその豆腐とうふの桶かきのある後あとが、蜘蛛くもの巣すだらけの藤棚ふじだで、これを地じ境がいにして壁かも垣かもない隣家となりの小家こいえの、炉ろの縁ふちに、膝ひざに手てを置いて蹲うずくまつていた、十とおばかりも年とし上あらしいお媼ばあさん。

見兼みかねねたか、縁えんがわ側がわから摺ずつて下おり、ごつごつ転まがった石塊いしころを跨またいで、藤棚ふじだを潜くぐつて顔かほを出いしたが、柔にゅうわ和わな面おも相さし、色いろが白しろい。

小兒衆こどもしゅう小兒衆こどもしゅう、私わしが許ゆるへござれ、と言いう。疾はやく白媼しろうばが家うちへ行ゆかつしやい、借かりがなくば、此処ここへ馬うまを繋ひぐではないと、馬士まごは腰こしの胴どうらん乱みだりに煙管きせるをぐつと突つ込んだ。

そこで裸体はだかで手てを曳ひかれて、土間つちまの隅すみを抜ぬけて、隣家となりへ連つれ込まれる時とき分ぶんには、鳶とびが鳴ないて、遠とほくで大勢おほしの人ひと声こゑ、祭礼まつりの太鼓たいこが聞きえました。「

高坂たかさかは打案うちあんじ、

「渡場わたしばからこちらこゝらは、一生いっせい私わたしが忘わすれない処ところなんだね、で今度いまど来きる時ときも、前まへの世よの旅たびを二度にどする氣きで、松まつ一本いっぴん、橋はし一ツいっすつも心こゝろをつけて見みたんだけれども、それらしい家いえもなく、柳やなぎの

樹も分らない。それに今じや、三里ばかり向うを汽車が素通りにして行くようになったから、人通もなし。大方、その馬士も、老人も、もうこの世の者じやあるまいと思う、私は何だかその人たちの、あのまま影を埋めた、丁どその上を、姉さん。」

花売は後姿のまま引留められたようになって停った。

「貴女と二人で歩行しているように思うですがね。」

「それからどう遊ばした、まあお話しなさいまし。」

と静に前へ。高坂も徐ろに、

「娘が来て世話をするまで、私には衣服を着せる才覚もない。暑い時節じやで、何ともなからが、さぞ餒かろうで、これでも食わつしやれつて。」

囲炉裡の灰の中に、ぶすぶすと燻っていたのを、抜き出してくれたのは、串に刺した茄子の焼いたんで。

ぶくぶく樺色に膨れて、湯気が立っていたです。

生豆腐の手掴に比べては、勿体ない御料理と思った。それにくれるのが優しいな

お婆さん。

地が性に合うで好う出来るが、まだこの村でも初物じやという、それを、空腹へ三

つばかり頬張りました。熱い汗が下腹へ、たらたらと染みた処から、一睡して目が覚めると、きやきや痛み出して、やがて吐くやら、瀉すやら、尾籠なお話だが七顛八倒。能も生きていられた事と、今でも思うです。しかし、もうその時は、命の親の、優しい手に抱かれていました。世にも綺麗な娘で。

人心地もなく苦しんだ目が、幽に開いた時、初めて見た姿は、艶やかな黒髪を、男のような鬘に結んで、緋縮緬の襦袢を片肌脱いでいました。日が経って医王山へ花を採りに、私の手を曳いて、楼に朱の欄干のある、温泉宿を忍んで裏口から朝月夜に、田圃道へ出た時は、中形の浴衣に襦子の帯をしめて、鎌を一挺、手拭にくるんでいっただす。その間に、白媪の内を、私を膝に抱いて出た時は、鬘を唐輪のように結つて、胸には玉を飾つて、丁ど天女のような扮装をして、車を牛に曳かせたのに乗つて、わいわいという群集の中を、通つたですが、村の者が交る交る高く傘を擎掛けて練つたですね。

村端で、寺に休むと、此処で支度を替えて、多勢が口々に、御苦労、御苦労というのを聞棄てに、娘は、一人の若い者に負させた私にちよつと頬摺をして、それから、石高路の坂を越して、賑かに二階屋の揃つた中の、一番屋の棟の高い家へ入つたですが、

私は唯幽たがすかに呻吟うめいていたばかり。尤も白姥しろうばの家に三晩みばん寝ました。その内も、娘は外へ出ては帰つて来て、膝ひざ枕まくらをさせて、始終集たかつて来る馬蠅うまばえを、払つてくれたのを、現いまに苦くるみながら覚えています。車に乗つた天女あまのむすめに抱かれて、多人数たにんずに囲まれて通かよつた時、庚こうし申堂しんどうの傍わきに榛はんの木で、半なかば姿を秘かくして、群集ぐんじゆを放れてすつくと立つた、脊せいの高い親仁おやじがあつて、熟じつと私わたしどもを見ていたのが、確たしかに衣服いふくを脱ぬがせた奴やつと見たけれども、小兒こどもはまだ口が利けないほど容よう体たいが悪わるかつたんですな。

私はただその氣け高たかい艶麗あでやかな人を、今でも神かみか仏ぶつかと、思うけれど、後あとで考えると、先まづさうだろうと、思おもわれるのは、姥うばの娘で、清水谷しみずだにの温泉おんせんへ、奉公ほうこうに出いていたのを、祭まつりに就ついて、村の若い者が借りて来て八ヶ村やがむら九ヶ村こぐまむらをこれ見よと喚わめいて歩ある行ゆくいたものでしよう。娘はふとすると、湯女ゆななどであつたかも知れないです。」

## 五

「それからその人の部屋とも思われる、綺麗きれいな小座敷こざしきへ寝かされて、目の覚める時、物の欲しい時、咽のどの乾く時、涙の出る時、何時いつもその娘が顔を見せない事はなかつたです。



自分でも、もう、病気が復つたと思つた晩、手を曳いて、てらてら光る長い廊下を、湯殿へ連れて行つて、一所に透通るような温泉を浴びて、岩を平にした湯槽の傍で、すつかり体を流してから、櫛を抜いて、私の髪を柔く梳いてくれる二櫛三櫛、やがてその櫛を湯殿の岩の上から、廊下の灯に透して、気高い横顔で、熟と見て、ああ好い事、美しい髪も抜けず、汚い虫も付かなかつたと言いました。私も気がさして一所に櫛を瞞めたが、自分の膚も、人の体も、その時くらい清く、白く美しいのは見た事がない。

私は新しい着物を着せられ、娘は桃色の扱帯のまま、また手を曳いて、今度は裏梯子から二階へ上つた。その段を昇り切ると、取着一室、新しく建増したと見えて、襖がない、白い床へ、月影が澆と射した。両側の部屋は皆陰々と灯を置いて、鎮り返つた夜半の事です。

好い月だこと、まあ、とそのまま手を取つて床板を踏んで出ると、小窓が一つ。それにも障子がないので、二人で覗くと、前の葎は露が流れて、銀が溶けて走るよう。

月は山の端を放れて、半腹は暗いが、真珠を頂いた峰は水が澄んだか明るので、山は、と聞くと、医王山だと言いました。

途端にくわいと狐が鳴いたから、娘は緊乎と私を抱く。その胸に額を当てて、私は我知

らず、わつと泣いた。

怖くはないよ、否怖いのではないと言つて、母親の病気の次第。

こういう澄み渡つた月に眺めて、その色の赤く輝く花を採つて帰りたいと、始めてこの人ならばと思つて、打明けて言うと、暫く黙つて瞳を据えて、私の顔を見ていたが、月夜に色の真紅な花——きつと探しましようと言つて、——可し、可し、女の念で、と後を言い足したのですね。

翌晩、夜更けて私を起しますから、素よりこつちも目を開けて待つた処、直ぐに支度をして、その時、帯をきりりとゞ《し》めた、引掛に、先刻言いましたね、刃を手拭でくるくると巻いた鎌一挺。

それから昨夜の、その月の射す窓から密と出て、瓦屋根へ下りると、夕顔の葉の擲んだ中へ、梯子が隠して掛けてあつた。伝つて庭へ出て、裏木戸の鍵をがらりと開けて出ると、有明月の山の裾。

医王山は手に取るように見えたけれど、これは秘密の山の擲手で、其処から上る道はないですから、戸室口へ廻つて、攀じ上つたものと見えます。さあ、此処から目差す御山というまでに、辻堂で二晩寝ました。

後はどう来たか、恐い姿、凄い者の路を遮つて顕るる度に、娘は私を背後に庇うて、その鎌を差翳し、轟と立つと、鎧うた姫神のように頼母しいにつけ、雲の消えるように路が開けてずんずんと。」

時に高坂は布を断つが如き音を聞いて、唯見ると、前へ立った、女の姿は、その肩あたりまで草隠れになつたが、背後ざまに手を動かすに連れて、鋭き鎌、磨ける玉の如く、弓形に出没して、歩行き歩行き掬切に、刃形が上下に動くと共に、丈なす茅萱半ばから、凡そ一抱ずつ、さつくと切れて、靡き伏して、隠れた土が歩一步、飛々に顕れて、五尺三尺一尺ずつ、前途に渠を導くのである。

高坂は、悚然として思わず手を挙げ、かつて婦が我に為したる如く伏拜んで肅然とした。

その不意に立停つたのを、行悩んだと思つたらしい、花売は軽く見返り、  
「貴方、もう些とでございますよ。」

「どうぞ。」といった高坂は今更ながら言葉さえ謹んで、

「美女ヶ原に今もその花がありますよ。」

「どうも身に染むお話。どうぞ早く後をお聞せなさいまし、そしてその時、その花はござ

んしたか。」

「花は全くあつたんですが、何時もそうやって美女ヶ原へお出の事だから、御存じはないでしょうか。」

「参りましたら、その姉さんがなすつたように、一所にお探し申しましょう。」

「それでも私は月の出るのを待ちますつもり。その花籠にさえ一杯になったら、貴女は日一杯に帰るでしょう。」

「否、いつも一人で往復します時は、馴れて何とも思いませんでございましたけれども、じお連が出来て見ますと、もう寂しくって一人では帰られませんから、御一所にお帰りまでお待ち申しませう。その代どうぞ花籠の方はお手伝い下さいませ。」

「そりや、いうまでもありません。」

「そしてまあ、どんな処にございましたえ。」

「それこそ夢のようだと、いうのだろうと思ひます。路すがら、そうやって、影のような障壁に出遇つて、今にも娘が血に染まつて、私は取つて殺さりようと、幾度思つたか解りませんが、黄昏と思ふ時、その美女ヶ原というのでしよう。凡八町四方ばかりの間、扇の地紙のような形に、空にも下にも充満の花です。」

そのまま二人で跪ひざますいて、娘がするように手を合せておりました。月が出ると、余り容易たやすい。つい目の前の芍しゃく薬やくの花の中に花片はなびらの形が變つて、真紅まっかなのが唯一輪ただ。

探まさがみつて前髪まえがみに押おしいた頂ただいた時、私の頭つむりを撫なでながら、余あまりの嬉うれしさ、娘ははらはらと落ら涙なみして、もう死ぬまで、この心を忘れてはなりませんと、私の頭つむりに挿させようとしましたけれども、髪は結んでないのですから、そこで娘が、自分の黒髪くろがみに挿さしました。人の簪かんざしの花になつても、月影つきかげに色は真紅まっかだつたです。

母おつかさん様の御大病ごたいびよう、一刻も早くすくと、直すくに、美女ヶ原あんどを後にしました

引返す時は、苦くもなく、すらすらと下りられて、早あかつきとや曉あかつきとの鶏との聲こゑ。

嬉うれしや人里うれも近いと思う、月が落ちて明あけがた方の闇やみを、向うから、洵じやどや々と四よ、五人連ごれ、松たいまつ明あを挙あげて近寄ひとなつかしつた。人可ひと懐なつかしくいそいそ寄ると、いずれも屈くつきよう 竟あらおのこな荒あ漢わで。

中うちに一人、見た事のある顔と、思い出した。黒くろ婆ばが家に馬うまを繋ひいだ馬士まごで、その馬士まご、二人の姿を見ると、遁にがすなど突いきなり然なり、私わたしを小脇ひつに引ひ抱かかえる、残のこつた奴やつが三人四人で、ええ！ という娘むすめを手取てとり足取あしとり。

何処どこをどう、どの方角ほうかくをどのくらい駈かけたかまるで夢中まごです。

やがて氣きが付くと、娘と二人で、大おおな座敷ざしきの片隅かたぐしに、馬士まご交まじり七しち、八人に取巻まきかれて坐ま

つていました。

何百年か解らない古襖の正面、板の間のような床を背負つて、大胡坐で控えたのは、何と、鳴子の渡を仁王立で越した抜群なその親仁で。

恍惚した小児の顔を見ると、過日の四季の花染の袷を、ひたりと目の前へ投げて寄越して、大口を開いて笑つた。

や、二人とも氣に入つた、坊主は兎になれ、女はその母になれ、そして何時までも娑婆へ帰るな、と言つたんです。

娘は乱髪になつて、その花を持つたまま、膝に手を置いて、首垂れて黙つていた。その返事を聞く手段であつたと見えて、私は二晩、土間の上へ、可恐い高い屋根裏に釣つた、駕籠の中へ入れて釣されたんです。紙に乗せて、握飯を突込んでくれたけれど、それが食べられるもんですか。

垂から透して、土間へ焚火をしたのに雪のような顔を照らされて、娘が縛られていたのを見ましたが、それなり目が眩んでしまつたです。どんと駕籠が土間に下りた時、中から五、六疋鼠がちよろちよろと駈出したが、代に娘が入つて来ました。

薰の高い葉を嚙んで口移しに含められて、膝に抱かれたから、一生懸命に緊乎縋り着く

と、背中へ廻つた手が空を撫でるようで、娘は空蟬の殻かと思えて、唯た二晩がほどに、糸のように瘠せたです。

もうお目に懸られぬ、あの花染のお小袖は記念に私に下さいまし。しかし義理がありますから、必ずこんな処に隠家があると、町へ帰つても言うのではありません、と蒼白い顔して言い聞かす中に、駕籠が昇かれて、うとうとと十四、五町。

奥様、此処まで、と声がして、駕籠が下りると、一人手を取つて私を外へ出しました。

左 右に土下座して、手を支っていた中に馬士もいた。一人が背中に私を負うと、娘は駕籠から出て見送つたが、顔に袖を当てて、長柄にはツと泣伏しました。それツきり。」

高坂は声も曇つて、

「私を負つた男は、村を離れ、川を越して、遙に鈴見の橋の袂に差置いて帰りましたが、この男は唾と見えて、長い途に一言も物を言やしません。」

私は死んだ者が蘇生つたようになって、家へ帰りましたが、丁度全三月経つたです。

花を枕頭に差置くと、その時も絶え入っていた母は、呼吸を返して、それから日増に快くなつて、五年経つてから亡くなりました。魔隠に逢つた小児が帰つた喜びのため

に、一旦本復をしたのだという人もありますが、私は、その娘の取つてくれた藥草の功德だと思つてです。

それにつけても、恩人は、と思つう。娘は山賊に捕われた事を、小児心にも知つていたけれども、堅く言付けられて歸つたから、その頃三ヶ国横行の大賊が、つい私どもの隣の家へ入つた時も、何も言わないで黙つていました。

けれども、それから足が附いて、一俣の奥、戸室の麓、岩で城を築いた山寺に、兇賊籠ると知れて、まだ邏卒といつた時分、捕方が多人数、隠家を取巻いた時、表門の真只中へ、その親仁だと言います、六尺一つの丸裸体、脚絆を堅く、草鞋を引ぬ《ひきし》め、背中へ十文字に引背負つた、四季の花染の熨斗目の紋着、振袖が颯と山風に纏れる中に、女の黒髪がはらはらと零れていた。

手に一条大身の槍を提げて、背負つた女房が死骸でなくば、死人の山を築くはず、無理に手活の花にした、申訳の葬に、医王山の美女ヶ原、花の中に埋めて歸る。汝ら見送つても命がないぞと、近寄つたのを五、六人、蹴散らして、ぱつと退く中を、衝と抜けると、岩を飛び、岩を飛び、岩を飛んで、やがて槍を杖いて岩角に隠れて、それなりけりというので、さてはと、それからは私がその娘に出逢う門出だつた誕生日に、鈴見の橋



の上まで来ては、こちらを拜んで帰り帰りましたですが、母が亡なくなりました翌年あつから、東京へ修行に参つて、国へ帰つたのは漸やっと昨年。始終望んでいましたこの山へ、後あとを尋ねて上のぼる事が、物に取とり紛まぎれている中に、申もうし訳わけもない飛んだ身勝手な。

またその薬を頂かねばならないようになつたです。以前はそれがために類たぐい少すくない女を一人、犠いけにえにしたくらいですから、今度は自分がどんな辛苦しんくも決して厭いとわない。いかにもしてその花が欲しいですが。―

言う中に胸が迫つて、涙を湛たえたためばかりでない。ふと、心付こころづくと消えたように女の姿が見えないのは、草が深くなつた所せ為いであつた。

丈たけより高い茅萱ちがやを潜くぐつて、肩で搔かき分け、頭で避よけつつ、見えない人に、物言かい懸かける術すべもないので、高坂は御おき経ようを取つて押おし戴ただき、

山川 <small>さんせん</small> 險谷 <small>けんこく</small>	幽邃 <small>ゆうすい</small> 所生 <small>しよしやう</small>	卉木 <small>きぼく</small> 藥艸 <small>やくそう</small>	大小 <small>だいしょう</small> 諸樹 <small>しよじゆ</small>
ひやくこくびやうが	甘蔗 <small>かんし</small> 葡萄 <small>ぶどう</small>	雨 <small>うし</small> 之所潤 <small>しよじゆん</small>	無不 <small>むふぶ</small> 豊足 <small>ふそく</small>
百穀 <small>ひやくこく</small> 苗稼 <small>びやうが</small>	甘庶 <small>かんし</small> 葡萄 <small>ぶどう</small>	其雲 <small>ごうん</small> 所出 <small>しよしゆつ</small>	一味 <small>いちみ</small> 之水 <small>しすい</small>
乾地 <small>かんち</small> 普洽 <small>ぷこく</small>	藥木 <small>やくぼく</small> 並茂 <small>びやうも</small>		

葎むぐらの中に日が射して、經きやう卷かんに、蒼あざく月かと思おもう草の影が映うつつたが、見みつつ進すすむ内に、ちらちらと紅くれなゐ来きたり、黄ききた来きたり、紫むらさ去さきり、白しろ過すぎて、蝶ちやうたわむの戯あそぶ風情ふうせいして、偈げに斑はん々はんと印いんし

たのは、はや咲交る四季の花。

忽然として天開け、身は雲に包まれて、妙なる薫袖を蔽い、唯見ると堆き雪の如く、真白き中に紅ちらめき、瞶むる瞳に緑映じて、颯と分れて、一つ一つ、花片となり、葉となつて、美女ヶ原の花は高坂の袂に匂ひ、胸に咲いた。

花売は籠を下して、立休ろうていた。笠を脱いで、襟脚長く玉を伸べて、瑩沢なる黒髪を高く結んだのに、何時の間にか一輪の小さな花を簪していた、棲はずれ、袂の端大輪の菊の色白き中に佇んで、高坂を待つて、莞爾と笑む、美しく気高き面ざし、威ある瞳に屹と射られて、今物語つた人とも覚え、はつと思つと学生は、既に身を忘れ、名を忘れて、唯九ツばかりの稚児になつた思ひであつた。

「さあ、お話に紛れて遅く来ましたから、もうお月様が見えましよう。それまでにどうぞ手伝つて花籠に摘んで下さいまし。」

と男を頼るようになつたけれども、高坂はかえつて唯々として、あたかも神に事うるが如く、左に菊を折り、右に牡丹を折り、前に桔梗を摘み、後に朝顔を手繰つて、再び、鈴見の橋、鳴子の渡、暁の夕立、黒婆の生豆腐、白姥の焼茄子、牛車の天女、湯宿の月、山路の利鎌、賊の住家、戸室口の別を繰返して語りつつ、やがて一巡した時、

花籠は美しく満たされたのである。

すると籠は、花ながら花の中に埋もれて消えた。

月影が射したから、伏拝<sup>ふしおが</sup>んで、心を籠めて、透かし透かし見たけれども、<sup>みまわ</sup>したけれども、見遣<sup>みや</sup>つたけれども、ものの薫<sup>かおり</sup>に形あつて仄<sup>ほのかまぼろし</sup>に幻かと思ゆるばかり、雲も雪も紫も偏<sup>ひとえ</sup>に夜の色に紛<sup>まぎ</sup>るのみ。

殆<sup>ほとん</sup>ど絶望して倒れようとした時、思い懸<sup>か</sup>げず見ると、肩を並べて齊<sup>ひと</sup>しく手を合せてすりと立つた、その黒髪の花唯<sup>ただ</sup>一輪、紅<sup>くれな</sup>なりけり月の光に。

高坂がその足許<sup>あしもと</sup>に平伏<sup>ひれふ</sup>したのは言うまでもなかった。

その時肩を落して、美女が手を取ると、取られて膝をずらして縋<sup>すがりつ</sup>着いて、その帯のあたり<sup>おもて</sup>に面を上げたのを、目を浴びて臍<sup>ろうた</sup>長けた、優しい顔で熟と見て、少し頬<sup>ほお</sup>を傾けると、髪がそちらへはらはらとなるのを、密<sup>そ</sup>と押える手に、簪<sup>かざし</sup>を抜いて、戦<sup>わな</sup>く医学生の襟<sup>えり</sup>に挟<sup>はさ</sup>んで、恍惚<sup>うつとり</sup>したが、瞳<sup>ひとみ</sup>が動き、

「ああ、お可<sup>なつかし</sup>懐い。思うお方<sup>かた</sup>の御病気はきつとそれで治<sup>なお</sup>ります。」

あわれ、高坂が緊乎<sup>しつか</sup>と留<sup>と</sup>めた手は徒<sup>いたずら</sup>に茎<sup>つか</sup>を掴んで、袂<sup>たもと</sup>は空に、美女ヶ原は咲満<sup>さきみ</sup>ちたまま、ゆらゆらと前へ出たように覚えて、人の姿は遠くなつた。

立つて追おうとすると、岩に牡丹ぼたんの咲さきかさな重かさなつて、白しろき象ぞうの大おおなる頭かしらの如ごとき頂いたへ、雲くもに入るよう衝つと立つた時、一度その鮮あざ明やかな眉まゆが見えたが、月に風なき野となんぬ。

高坂たかさかはと坐ました。

かくて胸むねなる紅くれないの一輪しほりを葉かたに、傍たわの芍薬しゃくやくの花、方ほう一尺いちせきなるに経きようを据すえて、合あ掌しょうして、薬王品やくおうほんを夜もすがら。

# 青空文庫情報

底本：「鏡花短篇集」岩波文庫、岩波書店

1987（昭和62）年9月16日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第七卷」岩波書店

1942（昭和17）年7月初版発行

初出：「二六新報」

1903年（明治36年）5月16～30日

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：砂場清隆

校正：門田裕志

2001年12月22日公開

2005年12月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 薬草取

## 泉鏡花

2020年 7月17日 初版

### 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>